

都市空間の 構想力

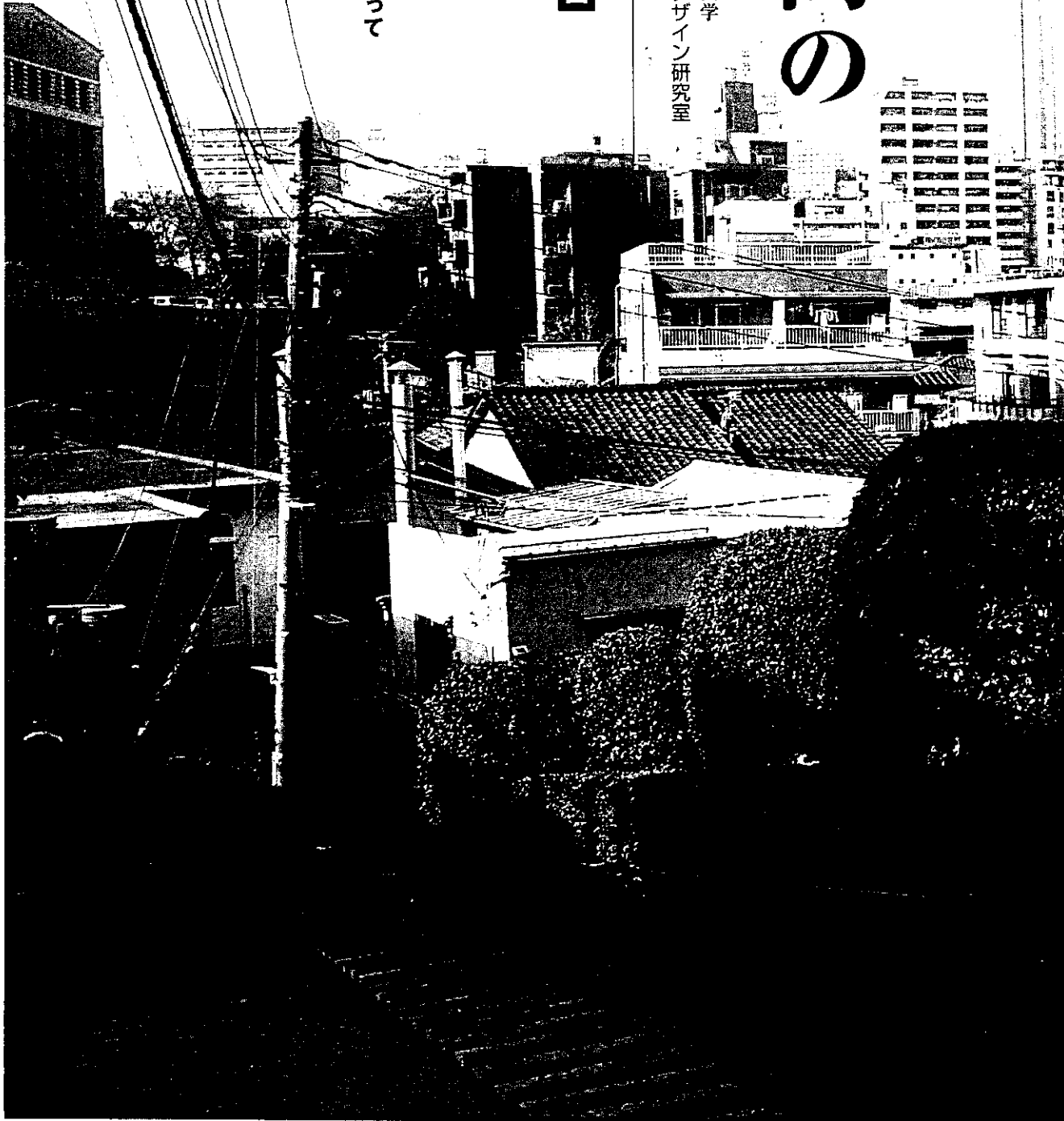
東京大学
都市デザイン研究室

空間文化
の博物学

東京

第2回

地形によって規定される
ミクロコスモスが
ブドウの房のように集まって
日本的な都市を
つくりだしている。



都市の立地を規定する
大きな地形

都市は地図の上に描かれているような抽象的な平面に立地しているわけではない。都市は土や岩でできたほこりっぽい土地のうえに築かれた。そして多くの場合、そこには小高い丘があり、鬱蒼とした低地がひかえ、川が流れ、山が近い。とりわけ山がちで平地の少ない日本では、古来こうした地形を拠り所にしたがら都市や集落が形づくられていった。

東京でも西側から張り出している舌状台地のひとつの尖端に江戸城が縄張りされたことはよく知られている。現在の皇居周辺を見ても、東側の丸の内と西側の番町・麹町とでは高低差が30mに及んでいる。武蔵野の洪積台地と利根川の沖積低地の接点だからだ。両者を繋ぐように北側には九段坂、南側には三宅坂が位置

する。つまり、九段坂や三宅坂は東京の立地の意匠を間接的に表現している坂道なのだ。

同時に富士山や筑波山、さらには向丘などの丘陵の尖端部への見通し、そうしたところに立地することの多い杜寺への眺望などが街路の軸線を決める際の重要な手がかりになったことも知られている。地形が都市形態の大枠を規定しているのだ。

こうした事情は当然ながら東京以外の城下町にも、宿場町や寺内町のようなほかの計画都市にも当てはまる。さらにいうと、自然発生的にできた在郷町やその他の集落においても、その立地が地形に依存しているという事情は変わらない。尾根道や谷道、山の辺道の存在も普遍的なものである。

たとえば、集落が河川の自然堤防のような微高地に立地していることは災害から安全なところを求める昔からの住民の智慧である。水や資源が豊富で、敵からも身を守りやすい場所を見つけ出すためには、周辺環

境を微細に読みとり、過去の記憶を繙く必要があっただろう。また、地形の起伏の多い日本では、閉鎖的な空間が多いため、拡がりのある眺望が得られることは単に防衛の意味を超えて、政治的さらには宗教的な意味を持つ場合が多かったことは想像に難くない。

こうしたことを通して、日本の都市は地形の襲を巧みに生かす都市空間の構成法を究めていった。

部分の集合としての都市と
部分を根拠づける微地形

日本の都市の多くは、しかしながら、単一の構想で全体が均一にデザインされたような都市ではない。市壁で囲われ、内部は中心核と広場とプールから成るような単一の構成原理が支配するようにはできていない。ひとつの意匠で都市が形成されているわけではないのである。日本の都市には市壁がないうえに、多くの場合、地形に即応したいくつもの部分から成っている。それが日本の都市をわかりにくくしている。しかしそれは混沌とは異なっている。

客を集める歩行者の幹線となっ

て、洪谷センター街の今風の風景の背後には川岸の景色がある。そうした目で洪谷の微地形をとらえると、微細な坂や屈曲の意味が見えてくる。都市空間の構想が透けて見えてくるのだ。

また、坂の線形、谷戸や丘陵地の土地利用のあり方にもそれぞれの場所なりの工夫が見られ、それが固有の地域景観の基盤となっている場合が少なくない。ブドウの都市が依って立つ微地形はたんにあらかじめ与えられた既存の条件というよりも、そのもとで都市の空間が生成されることになる重要な触媒であり、同時に都市の構成要素そのものなのである。

*1 近著では、上田篤「都市と日本人」(岩波新書、2003年) 149-150頁、同「日本人の心と建築の歴史」(鹿島出版会、2006年)、225-226頁などに述べられている。

*2 たとえばこれまでの業績として、横文彦他「見えがくれする都市」(鹿島出版会、1980年)第3章「微地形と場所性」(若月幸敏)など。

(西村幸夫/東京大学教授)



図2 渋谷センター街の町並み

微地形をもとに
都市空間の意匠を読む

の広い道路によって切り裂いていく過程であった。ここに、たしかに切り裂かれてしまったブドウの房も、細かく見ていくと、小さな自立した地区単位を辿ることができる。微地形を綿密に読み解くことは、分散自立型の日本の都市の構造を解明することにつながる。

ただし、大半が細分化された住宅に覆い尽くされた現代都市において、こうした微地形は実感することすら困難になっている。坂道や丘のかすかな存在や川の蛇行から地形の変化を感じ、そこから周辺の景色の微妙な変容を次第に際立たせることを試みよう。また、土地の履歴を振り返ることにより、いまは見えにくくなった空間の文脈をたぐり直すこともできるかもしれない。

たとえば、図2は渋谷センター街の町並み風景である。緩やかに屈曲する通り、両側に櫛比するショップ群——東京を代表する繁華街の風景のひとつといえる。この地区の歴史を振り返ると、ここがかつて渋谷川の支流、宇田川との川筋であったことがわかる(図3、4)。

そういう目で見ると、渋谷センター街のゆるやかなゆらぎはまさしく都市内河川の蛇行のしるしだということが分かる。センター街は現代の河岸なのだ。行き交う人はさながら「ゆく川の流れ」そのものである。高いところから低いところへ集まってくる水の流れのように多くの来訪



図1 東京の地形

る。上田篤氏が「ブドウの都市」と名付けたような独立した小領域の集合体として房状をなしている。「ブドウの粒」にあたる小さな独立単位が個々の町内である。町内は都市の管理・統治の単位であり、同時に自治の最小単位であった。そうした町内の単位は、多くの場合、微高地や微低地、谷戸の地形など、微地形の襲のなかに収まっている。近世においては、夜になると木戸が閉ざされ、各町内は文字通り孤立した島のような状態であったろう。逆に言うならば、近代とはまさしくこうした閉じた構造を直線的で幅

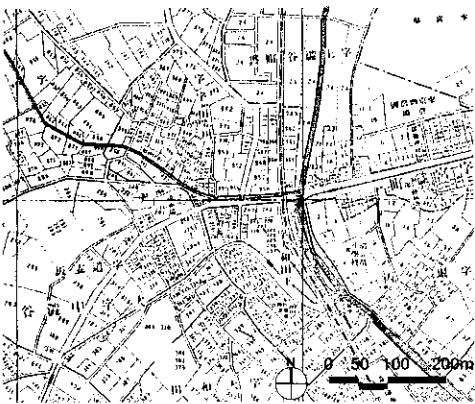


図3 明治40年頃の渋谷(一番地界入東京全図) 河川のみ加筆)

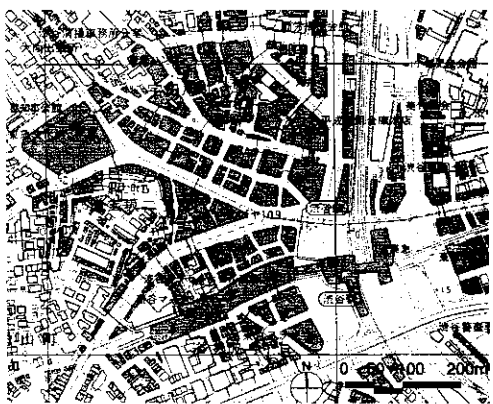


図4 現在の渋谷(国土地理院 1万分の1地形図)

●坂の連なりが一体の地域を浮かび上がらせる

都市空間に興行を与える地形の高低。それを生活者ももっとも日常的に体感できる要素のひとつが、「坂」である。同じ構造を持つ坂が連なることで、地形によって作り出される「地域のまとまり」を把握することが可能となる。

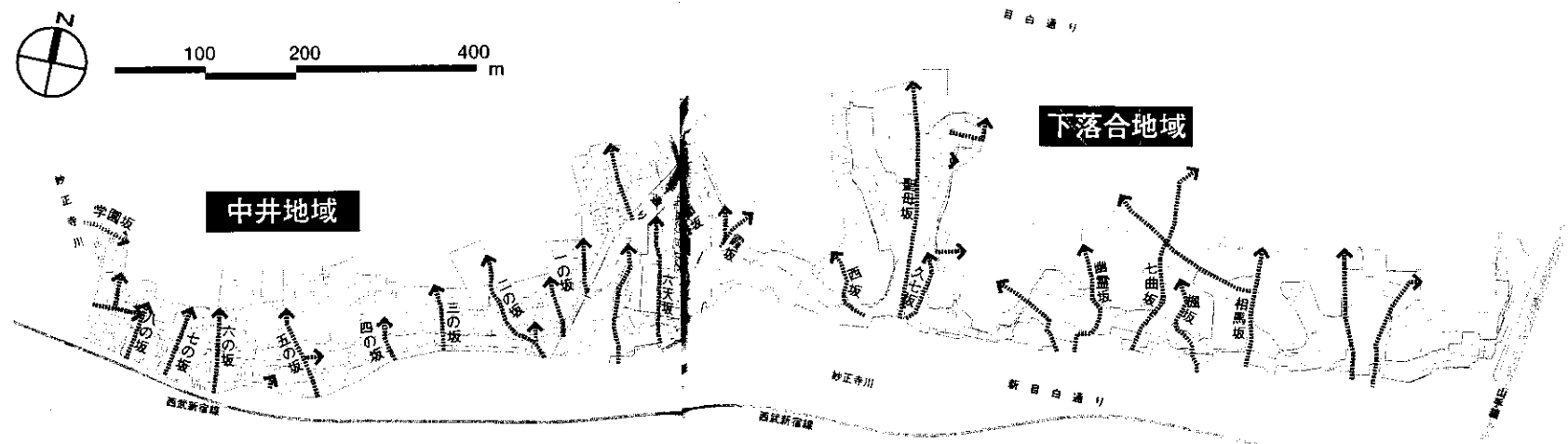


図5 目白崖線図(新宿区下落合地域・中井地域)
下落合の坂が何度も曲がる「ゆらぎ」坂なのに対し、「一の坂」から「八の坂」まで、中井地域の坂は直線状である。

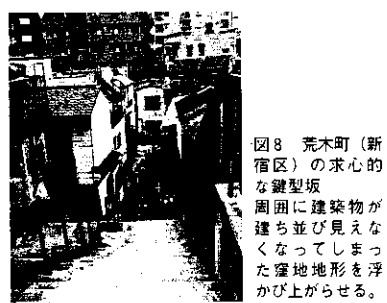


図8 荒木町(新宿区)の求心的な鍵型坂
周囲に建築物が建ち並び見えた窪地地形を浮かび上がらせる。

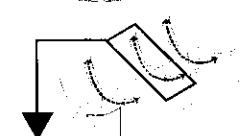
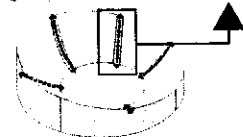


図9 戸越銀座(品川区)のU字型の坂
真すぐ谷地にかれた商店街に直交してU字型の坂が並び込む。

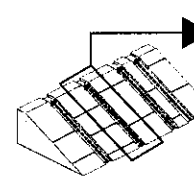


図7 中井(新宿区)の直線坂
大正期以降の宅地化の中で生まれ、「一の坂」から「八の坂」と名が付くとおり、まとまりが意識される。



図6 下落合(新宿区)の「ゆらぎ」坂
農道由来の坂は、カーブが幾重にも重なり、見通しもきかないため、台地と低地の結界を生み出している。

●坂で感じる都市空間の興行

日本の都市における街路は、地形を読み込んでつくられている。起伏のある中で、なるべく平坦に続く部分を選んで敷かれるのが尾根道、谷道といった主要街路であり、この間をつないで副次的な街路が形成される。日本の都市に見られる坂道の多くは、この副次的な街路として位置づけられる。坂を上り下りすることで、あるいは、麓や頂に立って坂を眺めるのみでも、地形は端的に実感されるが、さらに、坂群を面的に歩き込んでいくと、地形による地域のまとまりをあまり出すことができない。

●「ゆらぎ」坂が結界を生み出す

武蔵野台地の東端に位置する下落合地域(新宿区)には、目白崖線が走っており、斜面緑地も多く残っている。この崖線に沿って東西に歩くと、「相馬坂」「七曲坂」「久七坂」「幽霊坂」「西坂」など、北側の台地と南側の妙正寺川沿いの低地を結んで南北に通る坂道が、平行に連続している。これらの坂の線形を見れば、どの坂も真つすも挙げられよう。坂とその集合である崖線が、「結界」をなしているのだ。

●坂の「連呼」が斜面をまとめる

一方、下落合から山手通りを越えた西側の中井地域(新宿区)にも目白崖線が続いているが、こちらでは、真つすの坂が東西方向に八本、平行して並んでおり、東から順番に、「一の坂」から「八の坂」と、連呼するような名前がつけられている。

●坂の連なりがあまり出す地形

これらの坂は、二の坂を除いて、震災後の宅地化の際に形成された。斜面の宅地化を前提としながら、造成技術の発達も伴って、直線の坂道となっている(図7)。ここでは、崖線は「結界」ではなく、宅地化された「領域」である。その命名の仕方からも、これらの斜面とこの斜面を貫く坂は、一体の領域として捉えられていることがわかる。とはいっても、この坂の連なりは、単調な景観の連続を意味しない。斜面の宅地は、それぞれの坂から枝葉のように分かれてアクセスする街路構造で形成されており、坂ごとにもある種まとまった領域が存在し、多様な景観が

●坂の連なりがあまり出す地形

くではなく、緩やかなカーブを描きながら「揺らいで」いることに気づく(図6)。この辺りは、戦災の被害が少なく、現在でも農道や野良道が地域の骨格を形成している。江戸時代から、江戸の周縁部にある近郊農村として存在し、落合堂で有名な行楽地でもあった。妙正寺川沿いには、水田が広がっており、これらの水田を耕す農家はみな、斜面上の台地に住んでいたらしく、これらの坂は、田畑と住まいをつなぐ農道、つまり通勤路として利用されていたと考えられる。

●坂の連なりがあまり出す地形

これら古くからある坂道の「ゆらぎ」は、勾配を最小限に抑えるための経路が入念に選び取られた結果であろう。この「ゆらぎ」によって、坂の上から下へ、あるいは下から上へと視線を注いでみても、見通しがきかず、台地と低地とが明確に分かたれることとなる。同時に、カーブの繰り返しは、視界における木々や建物の織り重なりをつくり、豊かで変化のある住宅地景観を生み出している。さらに「ゆらぎ」の動きとして、自動車の交通を抑える効果を生み出されている。

●坂の連なりがあまり出す地形

例えば、八本の坂の中で最も古い二の坂は、かつての農道の線形をそのままに残している。四の坂は、唯一階段による坂道であり、両側の大谷石と竹林に囲まれた風景は、静謐な空間を作り出している。そして、「五の坂」では、両側に切り通しのように大谷石の石垣のそびえるその先に、真つすく伸びる坂道と切り取られた青空を望むことができる。

●坂の連なりがあまり出す地形

このように、同じ構造をもつ坂の連なりを追うことで、地形が作り出している都市構造と景観のまとまりをあまり出すことができる。荒木町(新宿区)は、カギ型の坂や階段の求心的なまとまりが、建物で見えなくなった、すり鉢のように窪んだ地形を顕在化させている(図8)。また、戸越銀座(品川区)では、商店街を底としたU字型の坂の連続が、かつて川筋であった商店街とこれを優しく包む周辺の街並みとの関係性をあまりだしてくるのである(図9)。(野原卓、坂内良明)

●谷あいと高台が相俟って体を成す

山の手では開折谷と舌状台地が複雑に絡み合っている。しかし両者は単に交錯しているのではない。ミクロに見れば、交錯しながらも確かに結び付き、相通することで共棲し、一領域を成している。

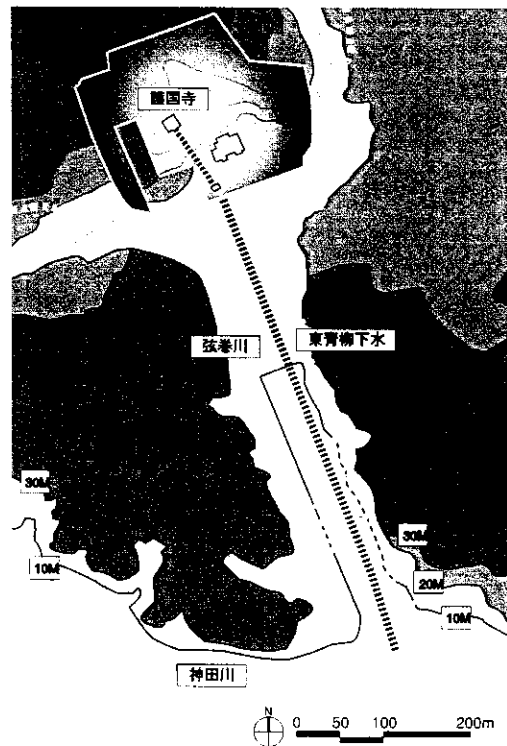


図10 護国寺周辺の地形の構造
関口・小日向台地ともに崖状の斜面が続く。
弦巻川、東青柳下水ともに現在は、暗渠化されている。



図11 谷あいの道から高台の護国寺を望む



図12 護国寺周辺の地形
（「カシミール3D」による作成）



図13 江戸後期の護国寺周辺（近江屋板切絵図）
護国寺の門前には、
整然と区画された街
区が並ぶ。

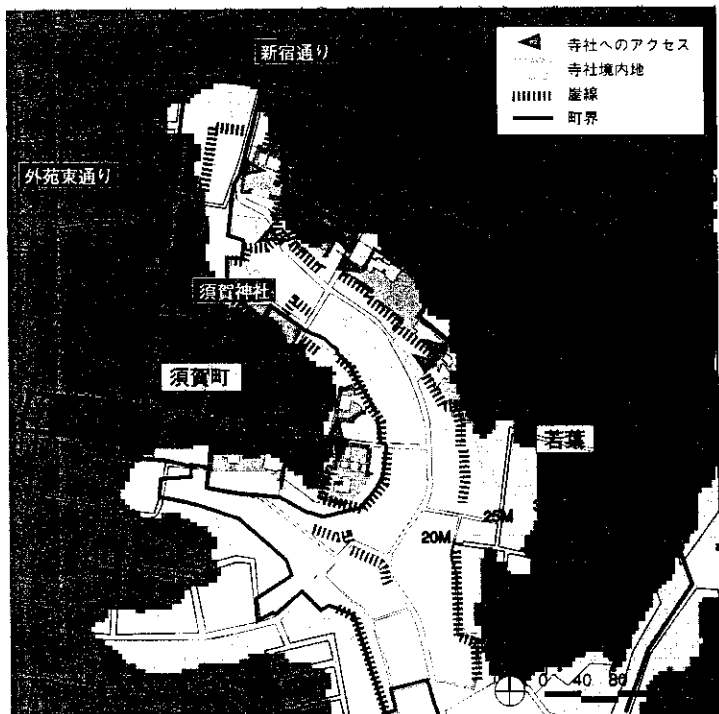


図14 若葉・須賀町周辺の地形と寺社の立地
四谷・麴町台地に湾曲した谷筋が切れ込み、谷あいと高台の地形を創り出している。
谷あいには住宅や商店を中心とした低層高密度の市街地が、高台には寺社を中心とした比較的低密の市街地が広がっている。



図15 谷あいの路地の風景
路地の背景には、寺社林を望むことができる。



図16 高台（須賀神社境内）からの俯瞰



図17 若葉・須賀町の模式断面構成
高台の際に立地する墓地や緑地によって生み出される空隙性は、谷あいの住環境の維持に貢献している。

●谷あいと高台は共棲している

谷あいと高台の二分法は、東京の、特に山の手と呼ばれる地域の構造を俯瞰的に把握する際に有効である。大規模な大名屋敷や寺社が立地し、その間を計画的な街区割りの旗本屋敷や組屋敷、寺社群が埋めていた高台は、現在では低密度の緑の多い良好な住宅地となっている。一方、農村集落を基盤とした纏まった規模の町人地が主であった谷あいは、現在では家屋が比較的密に建ち並ぶ市街地となっている。谷あい、高台それぞれの特性に順応した江戸期の土地利用構想は、現在にも影響を強く残している。

しかし、俯瞰の視線を降ろして個別の界限をつぶさに見ていくと、谷あいと高台とはこのように単に峻別される存在ではなく、むしろ有機的に結び付いていると理解する方が適当な場合が多い。谷あいと高台との共棲の多様な形、時に両者を包含する複合体に、時に両者の相関する関係性にこそ、巧みな構想が看取されるのである。

●谷あいと高台の結束が聖域を誘う

谷あいと高台の地形の結び付きを見れば谷方向に優れた眺望を提供する視点場として貴重な存在であるが、谷あいにあってはどうか。若葉の蛇行する谷筋の街路からは、しばしば街並みの背景やアイストッブとして台地上の寺社が顔を覗かせる。家屋で埋め尽くされた閉鎖的な谷あい。一瞬の開放感や慰労感を与えている。しかしそれだけでは不十分。

現在、参道沿道の建物は高層化し、弦巻川は高速道路の敷地になり、東青柳下水は暗渠化され、原地形は視野から消えつつあるが、壮大なスケール感に健在である。地形が触発した大胆な構想力が容易に体感されるだろう。

●谷あいと高台が際で相通する

谷あいと高台が一望に収まるような単純さはないが、両者が確かに共棲している場合もある。高台は武家地、際は寺社地、谷あいは町人地という典型的な土地利用がなされていた若葉・須賀町（新宿区）を例にとろう。

明治以降、武家地や町人地は更新を繰り返したが、建造物のみならず非建築率も墓地、寺社林といった形で聖域としての強い意味付けを有していた寺社地だけは、都市の中で貴重なオープンスペースとしてそのまま残存し続けた。こうした際の空地は高台にとつて

事に生かして都市の空間を創出した事例として真っ先に思い浮かぶのは、音羽（文京区）に鎮座する江戸幕府建立の護国寺とその門前町である。

音羽は、弦巻川、東青柳下水という神田川に注ぐ二つの並行する小河川を東西の境界線とする谷筋を中心とした一帯である。原地形で特徴的なのは、東西で相対する関口台地、小日向台地に加えて、北側も雑司ヶ谷台地で谷筋に封をされた格好となっている。つまり、南側の神田川を除く三方を台地に囲われている点である。神田川畔に立つと、東西に左右対称の切り立った崖地があり、見通しの先に雑司ヶ谷の高台が見えるという構図は、直線街路に高さの揃った建築物が並び、アイストッブに象徴的建築物があるという、極めて人工的な「ヴィスタ」と類似する。

護国寺とその門前町はこの原地形が本来備えていた「ヴィスタ」性に誘われたのだろう。アイストッブとなる雑司ヶ谷の高台には本堂に向かって高みを上っていく象徴的な構成を持つ護国寺が立地した。幅100m、延長1000mに及ぶ細長い谷あいは、中央に幅15間という大規模の参道を取り、そ

は谷方向に優れた眺望を提供する視点場として貴重な存在であるが、谷あいにあってはどうか。

若葉の蛇行する谷筋の街路からは、しばしば街並みの背景やアイストッブとして台地上の寺社が顔を覗かせる。家屋で埋め尽くされた閉鎖的な谷あい。一瞬の開放感や慰労感を与えている。しかしそれだけでは不十分。

仮に谷あいから直接見えなくても、空地を備えた聖域がそこに存在していること自体が重要である。というのも、台地の際の建造物の谷地からの「見え」の高さには谷の深さが加算される。従って谷地に対する圧迫感は大きく、その閉鎖性を倍化させてしまう。際の寺社は谷地からは「見えない」オープンスペースであることで、谷地の町が閉鎖性を過度に強めるのを未然に防いでいる。市街化が進めば進ほど、際に宿るこの「見えない」力が効いてくるのである。

近年、多くの谷あいの町で住環境改善が進んだ一方で、高台の際の開発も進んだ。両者の共棲を前提とした構想が、いま必要とされている。

（中島直人・岡村祐）

●両岸を分かつ溪谷が地域を束ねる

大地に深く切り込む溪谷は、両岸を隔てる強固な境界であるが、都市化の過程において取り込まれると、その強さ故に、両岸の領域をまとめ上げる存在となる。

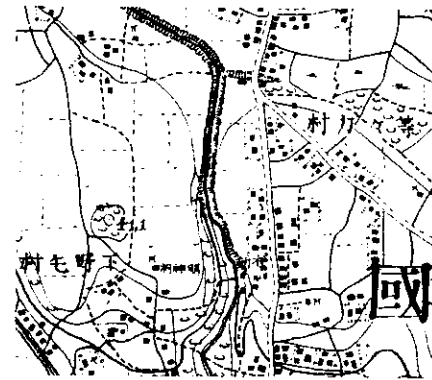


図18 明治初期の等々力溪谷周辺(明治14年陸軍迅速測図) 溪谷は等々力村と下野毛村の村境として機能している。



図19 現在の等々力溪谷の様子



図20 住宅地に残された等々力溪谷(Google Earth) 市街化の過程で取り込まれ、現在では地域を束ねる存在となっている。

●境界としての溪谷地形の強度
 水の流れは、それが自然のものであれ、人為的なものであれ、時にダイナミックな地形を生み出す。特に台地が海際まで張り出す東京の地勢のもとでは、土地を大きく分断する深い谷川溪谷が形成される。そもそも、線のかつ絶対的な非遮蔽地としての川は、本質的に領域を分かつものであるが、とりわけ溪谷はその度合いが著しい。
 溪谷は、その地形的性質から強度ある境界として機能する一方で、積極的な土地利用が困難であるため、周囲の都市化の圧力がいかに高くとも、地形的な特異点として残り続ける。このことが、いささか逆説的ではあるが、このことが分断された両岸の領域をまとめ上げる。ここに溪谷の妙があると言える。

てできた、都区内唯一の自然溪谷として知られる。
 この付近が農村であった当時、耕地として利用できない溪谷は、集落の周縁を規定する境界であった(図18)。大正末から昭和初期にかけて、一帯では大規模な耕地整理が行われ、郊外住宅地へと変容をはじめた。このような中で、昭和8年に周辺地域が風致地区に指定されたことにより、等々力溪谷は公園の整備がなされ、積極的に保全されることとなる。今日、溪谷を覆う豊かな緑は周辺住宅地のアイデンティティとなり、地域を束ねる積極的意味を付与されている(図19、20)。
 集落の境界として機能していた等々力溪谷は、周辺の市街化に飲み込まれる中で、地域を隔てるものからまとめ上げるものへと転化していった。

●溪谷を市街地に取り込む

市街化された東京の郊外において、残り続けているものに、等々力溪谷(世田谷区)がある。武蔵野台地の南端に位置するこの溪谷は、多摩川に注ぐ谷沢川の流れが国分寺崖線を浸食し

●溪谷に拠点を築く

都市化の中で残り続けた溪谷が開発などの積極的な関与を受けることで、地域をさらに強くまとめ上げる場合がある。
 お茶の水付近の神田川(千代田区・

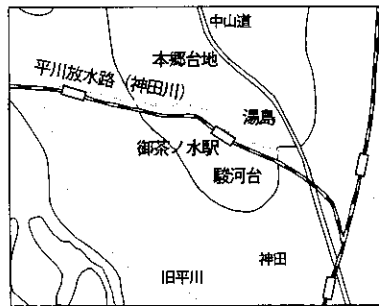


図21 平川放水路の開削 (『図説 江戸・東京の川と水辺の辞典』を元に作成)



図22 江戸後期の御茶ノ水周辺 (天保江戸大絵図)

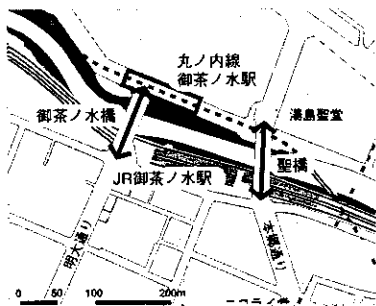


図23 現在の御茶ノ水周辺



図24 御茶ノ水橋から下流方向に見た神田川の溪谷。正面に聖橋、左右の岸にそれぞれ丸ノ内線、JR線の御茶ノ水駅を望む。

文京区)は、江戸時代に本郷台地の南端を開削してつくられたものである。当初の開削目的は、平川(神田川)の氾濫から下町を守るための流路付け替えであった(図21)。低地の流れを、台地を越えて通すため、河道は深く掘り下げられた。結果として出来上がった溪谷は、駿河台と湯島の両地区を隔てたが、特異点となった溪谷そのものは「茗溪」と呼ばれ、名所として親しまれた。

そこへ明治以降、大きな転換が起こる。溪谷に拠点が付与されるのである。端緒として、明治の市区改正事業により御茶ノ水橋(1890)が架けられる。その後、外堀を利用して敷設された甲武鉄道(現中央線)の起点として、溪谷の右岸に収まるように御茶ノ水駅(1904)が開業することで、

岸への設置も検討されたが、地形的な制約から、溪谷を挟んで左右に駅が配置される格好となった(図23)。
 このような履歴を経て形成されたお茶の水界限には、教育・医療機関をはじめとした都市機能が集積してきた。交通拠点の構築により市街地形成の核として立ち現れる。右岸のホームに佇みながら、あるいは両岸を繋ぐ橋を渡りながら、お茶の水を行き交う多くの人々が、都市の中に切り立つ溪谷の風景を体験する。そのことが、お茶の水のイメージを溪谷に結びつける(図24)。このような風景は、先に述べた溪谷の持つ逆説的な特性が、都市形成の過程で生かされ、出来上がったものなのだ。

一帯はにわかに拠点を帯び始める。さらに関東大震災後の復興事業により、印象的なアーチを持つ聖橋(1927)が、新たに両岸を結びつける。戦後になると、今度は左岸に埋め込まれる形で、地下鉄丸ノ内線の御茶ノ水駅(1954)が開業する。この駅は当初、国鉄との乗り換えを考慮し、右

両岸を強く分断しつつも地域を束ねる潜在力を持った溪谷は、都市の中で特異点として残り続ける。そこに積極的に関与することで、場所の強度はさらに高まり、地域をまとめ上げる力が働く。それを表出しているが故に、風景もまた、強度を持っているのである。
 (永瀬節治・中島伸)